



特別寄稿

第1回目のテーマ

音楽の感動を伝える時代

「新しい製品は、音は良くなったけど何か足りない」「性能が上がれば上がるほど音楽が楽しめなくなる」。読者の方々より、このような悩みを寄せられることが最近特に多くなった。そんな状況のなかで、音質だけでなく「音楽の感動を伝える」という形の記事があってもいいのでは?ということでカイザーサウンドの代表である、貝崎静雄氏と林 正儀氏タッグを組んだ注目の企画がスタートする。このコーナーでは、同社が取り扱うローゼンクランツ製品のご紹介にとどまらず、オーディオ再生における普遍的なテーマも交えながらお届けしていくことにする。ぜひともお楽しみいただきたい。

●レポート：林 正儀

Masanori Hayashi Photo by 田代法生

林 正儀がたどるローゼンクランツの軌跡

よい音で音楽を聴くために、私たちはオーディオをやっている。そのオーディオが時には喜びとなり、またあるときは苦痛となることだつてある。「クツクツ」。趣味が苦痛になつてはどうかと思うが、手間ひまと予算をかけ、コンポやアクセサリをいくら買い替えても音が芳しくなければ、もう立派に苦痛である。成功の法則のようなものはないのか? 私はローゼンクラ

性の部分が強いのだが、もう一面では科学サイエンスであり。絵画や彫刻とは違う。さらに、オーディオ再生で起きている現象には、貝崎さんの言葉を借りれば、すべてに原因があり、起きるべきして起こったはずだ。だから、音楽に躍動がない。流れが止まっている。

で、たまたま聴いた組み合わせが良かっただけ。それも限られた環境下における結果ではない。だから数ではなく好みでもなく、もっと俯瞰した所からみた、ゆるぎのないオーディオの普遍性(=哲学)に導かれた気がするのだ。いきなり理屈っぽくなって申し訳な

●連載にあたって 悩めるオーディオファンのための 誰もが共感できるガイドンス作り

ントの貝崎静雄さんと、いろいろなテーマで話すことがある。無手勝流というか、オーディオの常識からかけはなれたような、発想の斬新さに大いに刺激を受けるわけだが、悩めるオーディオ仲間のために、何かやれることがあるだろうと考えた。それがこの4回の連載だ。

何だかよそよそしくて感動が伝わらない。というようなことまでも物理現象としてとらえ、その原因を明らかにしたうえで解決策を示すこともできるわけだ。こう考えると、機器の相性という問題や私たちが普段にやっている組み合わせも、それで良いのかと思う。世の中にはゴマンと機器がある。ありとあらゆるものを相性とか組み合わせとかいっていたら

いが、もっとオーディオを科学し、物理法則にのっとった趣味として楽しみたい。「ああ、いい音だなあ」「こうすれば実現できる」と、誰もが共感できるガイドンスとしたい。そのために、少し頭のトレーニングをしよう。常識といわれていることからガラリ角度を変えた新しい視点だと思っが、ローゼンクラントのセオリーも紹介しながら考えたい。

まず立ち位置をはっきりさせたい。趣味と言ってしまったが、その一面で「音楽は科学である」。感

際限がない、実際はせいぜい数台



「オーディオ・ホームシアター展」ではカイザーサウンドのブースで筆者が講演も行った



メグでのデモンストレーションのようす。同社代表の貝崎静雄氏がレクチャーしながら実際の効果を体験した

「ローゼンクランツのセオリー」

◆その1

「素材よりも形で音が決まる」

形があつてこそ素材は生きる
ケーブルやコンポも同様

よく「真鍮くさい」「アルミくさい」ということがある。素材に固有の音があるのはわかる。でも例えばインシュレーターについて語ると

き。金属片(素材)だけ取りだして音まで決めつけるのは間違いだ。同じ素材のインシュレーターにはさまざまな形やサイズがあるわけで、「素材よりも形」の方が音を支配するという節もある。真鍮やウッドがあつた形になるから、素材が生きるのだとしよう。これはケーブルについても同様だし、アンプなどのコンポでもいえるはずだ。また、「方向性」という別の要素もある。

◆その2

「ノンカラーレ」「シヨンがいいのか?」

フラットがいいというところも
考え直さなければならぬ

何の色もつかない、クセがない音が理想のように言われるが、本当だろうか。クセのない音などないわけで、であるならたまたまさんのクセをどのように使分けけるかに目を向けた方がよいと思う。また、

フラットがいいということも、考え直さないといいけない。これがスピーカーや部屋の特性についていえるだろう。

◆その3

「日本の劣悪な電源事情」

100Vだからこそ育った
日本のチューニング技術

日本はステレオで音楽を楽しむのに、世界一不利といえる。その理由は電源事情だ。まず100Vという電圧の低さで、アンプなどの機器にとって200ボルトであれば半分の電流ですむところを。大電流を流し続けなければならぬので音質的に不利。「100Vという、極めて不利な状況のなかで、いかに音質を高めていくか?」ということを追求めていったからこそ、日本はオーディオチューニングの分野において、世界をリードしているのだと言っているはず。さらに、家電製品のインバーターノイズの問題も大きくなりつつあ

るが、新たなオーディオ対策のテーマとしても注目が集まってくるに違いない。

◆その4

「ケーブルは長さで音が決まる」

12音階のオクターブ理論は
オーディオにもあてはまる

ケーブルは短い方が音がよい。電気抵抗による伝送ロスが減るため、と単純に考えたいくなるが、そうじゃないのではないかと音質がよくなる、音楽が生きてくるようになる。ある最適な長さが基準になるのだという説もあるのだ。

貝崎さんはその研究を続けていて、聞けば聞くほど興味深い。音楽は、すべて長さによって成り立っているからだ。12音階のオクターブ理論は存じかと思うが、この音が調和してきれいに聴こえるためのルール(平均律)を、オーディオにあてはめてみたらどうなるだろうか? いずれ詳しく解説したいのだが、長さで言うと、1の長さ

Rosenkranz Stream Reviver (写真右)

気流コントローラー ¥140,000
●サイズ：(上開口部)49W×75Dmm(下部)90W×143D×348Hmm

Sound Revolver (写真左)

気流コントローラー ¥70,000
●サイズ：φ79×94Hmm

◆その5
「電気」「振動」「気流」
ステレオの音を決める3要素
なかでも「気流」に注目したい

のものとその2/3の長さのものを同時に振動させたとき、いちばん音楽的魅力のある音とする。これが調和で下とソの音だ。きれいに調和する長さが、一番いい(最適な)長さとなる。この理論を応用すると、例えばスピーカーボックスやアンプの筐体設計でも、音のよくなる寸法比というものがあるはずなのだ。

最後にテーマとしてぜひ挙げておきたいのがこれである。ステレオの音を決める要素とは何か? このうち「電気」と「振動」は。普段から言われていることで、いかにノイズからガードするか、ということなので、ある意味でわかりやすい。メーカーや我々オーディオファンの研究テーマでもあるのだ。

ところが「気流」となると空気の流れ、気圧の変化でもあり、リスニングルームにおいて、いちばん正体のつかみにくいものだろう。だから「気流」や「波動」を真正面からテーマに掲げ、オーディオの音や音楽を探求している人は、残念ながらお目にかかったことがない。ローゼンクランツの貝崎さん以外には……。

●ローゼンクランツの「気流」アイテムを試す

気流を絶妙にコントロール
音楽の抑揚表現が豊かになる

「気流」のコントロールを目的としたローゼンクランツの2つのアイテムを紹介しよう。

「ストリーム・リバイバー」は高さ30cmほどの細長い中空の金属だ。側面には大小様々な四角形のパタ

ーンがくり抜かれていて、ランダムな開け方だが、気圧差を利用して気流に加速度効果を与え、音楽の抑揚表現を豊かにする。「サウンド・リボルバー」はタワーマンシヨンの吹き抜け構造からヒントを得たそうだ。6角8角の金属筒にたくさんの穴が開いている。これは音楽が調和する「ドとソの関係」で、1と2/3の比率を採用しているのだ。

以前、吉祥寺の「メグ」で実演したときは、すごい反響だった。「ストリーム・リバイバー」をスピーカーの前にセット。へばりついていた気流がふわっと動くように、キレと音ヌケがよい。ドラムがパワフルになる。スナップの効いたステイックさばきが見えるよう、俄然ノリがよくなった。これ一本で部屋の空気が動くとは信じにくい。音の変化が証明している。スピーカーの空気を圧を受けて、「メグ」のすみずみまで気流、すなわち音そのものをコントロールしているのだから。

●自宅でも試してみる

まさに、音楽の風が漂う。活力的でリアルな音質に変化
それならば、筆者宅ではどうか?

この両方のアイテムが変わるが試した。「ストリーム・リバイバー」をモニターオーディオのスピーカーPL300のわきに置いてみた。形も容積も違わが家だが、気流効果は確かにあった。今度はクラシックやハイレンジ音源で聴いたところ、管弦楽に抑揚がつき、コントラストが拡大するような変化だ。密度も濃く、空間情報が溢れる。

一方の「サウンド・リボルバー」は小さいながら大きな効果。タワーで空気が吸い上げられるように四方八方に音楽の風が漂う。ヴォーカルに潤いが出て、音場全体が深みのある響きとなる。併用すれば双乗効果は上々。空気が浄化され、音楽そのものがさらに活力的でうきうきと愉しく、リアルになるような変化である。

今回は提案ということで、いくつかのテーマ出ししてみた。読者の方からのご感想なども取り入れつつ、次回はいよいよ具体的な実践内容も展開できたらと思う。

